

◎決死の愛が最高の愛

さて、今度は「表3」3-2（四十二頁参照）の右側の良い死の方を見ていくことにしましょう。こちらの十二作品は、いずれも宮沢賢治の童話の中でも名作と言われる作品ばかりです。そして最も賢治らしい世界を感じる作品が多いです。

まず上から三作品の特長である末期の「笑い」についてですが、この三つの作品に描かれた「笑い」は、非常に共通しています。それは死に至る三者が決死の愛に生き残った結果死に至ったということです。いずれも自分の命を賭けて愛に生きた結果として死に至るというストーリー設定なのです。

「よだかの星」のよだかは、自分が鷹に殺されそうになって、初めて自分も虫を食べて生きていたことに気が付いて、殺される虫の苦しみが初めて自分の身になって分かるんですね。それでも虫を殺さないようにしようと思うのです。それから鷹に名前を変えろと言われていて、神様からもらった名前を変えたくないと思ったのです。この二つのために、よだかは星になると、そんなこと不可能と言われながらも飛ん

でいく、という話ですね。これは命を賭けた愛だと思えます。生存罪を犯さないためには自分の命を捨てても、それをやろうという、自分を捨てた愛です。しかもこれは、自分の体はたとえ失っても本当の自分自身であることを貫くためでもあるんです。神様からもらった名前とは、本当の自分自身であることと、神様の子どもであることの両方を示すと思います。ですからよだかの飛翔とは、決死の愛で神へ回帰する姿と言えるかもしれません。「よだかの星」の不可能をこえる決死の愛については、『変革の風と宮沢賢治』（桑原啓善 でのぼう出版 七三〇七九頁）に説かれています。私もそこから考えていきました。

次の作品「ひかりの素足」、これもお兄さんの一郎が弟をかばって、最後は自分はどうなってもいいとかばい尽くした時に、「如来寿量品第十六」というものが、ふつと浮かんでくるんですね。あれはやっぱり命を賭けた無私の愛、その一すじの光からすべては始まったのだと思います。だから地獄からひかりの世界への世界の転換、それは一郎の決死の愛から起こったのだと、そのように描かれていると思います。仏

は常にいても、気付く人間がいなければいけないのと同じ。気付くのは自分を捨てた決死の愛、つまり自己内在の仏性の光によるのだと言っているようです。

「二十六夜」も可哀想に、いじめ殺されかけた瀕死の穂吉、フクロウの子供が死にそうなのだけでも、「恨みの心は修羅となる、かけても他人は恨むでない」というお説教を、死にそうで痛くて辛くてたまらないのだけでも、恨まないでそれを聞くうとするわけですね。これも命懸けですね。命を賭けて聴こうとした、恨まないと意志して。これはやはり愛ですね、そういうように描いております。

このように三人共それぞれ命がけの愛、これは最高の愛ですよ。自分の命を差し出して愛を貫こうとすること、これ以上のことは誰も出来ないです。ですから、命を賭けた愛が最高の愛です。けれども命を賭けて、たとえ命（肉体）を失っても、実は生命は永遠だから魂の救いがあるのだということ、これを賢治さんは言いたかったのだと思います。ですから笑う顔。あれは本当の幸福、愛に生き通したから本当の幸福、だから肉体の幸福ではなく魂の幸福が本当の幸福なのだという、それを示しているの

だと思えます。

◎魂の浄化進化が本当の幸福

ですからこの世というのは、肉体を持っていろんな人と触れ合って、怒ったり笑ったりして黒〔意地悪〕球や白〔親切〕球を投げますけれども、必ず投げた球が返ってくるので、それを何度もくり返して結局そうやって最後は愛に生きることを学んでいく。そのための学校なのだといえると思います。黒球投げると黒球〔不幸〕が戻ってくるから苦しみます。でもその苦しみ痛みでもって、人は初めて「意地悪はいけないのだ」ということに気付くわけです。苦難で人は進化する。どうしてかといいますが、本当は人間というものは愛が本質なのだと思います。性善説といいますが、仏教では仏性ありといえます。霊性とか神性とかいうものです。愛が本質だから、だから愛に生きようと必ず人間は気付いていけるのです。ですから愛によって、その愛を自分が発揮する時に、魂は浄化、進化するんですね。つまり魂の浄化進化が本当の幸福なの

です。ですから結局、本当の自分は八十年で滅びる肉体ではなく、仏性とか霊とかいう永遠不滅なるものではないでしょうか。

◎死後の世界を描き、生命の法を明らかにする

ですから、本当の幸福は魂が浄化進化することだよ、物をたくさん集めて安楽に暮らしたり、ただただ健康で長生きさえすればいい、そういうものじゃないんだよ。肉体じゃなくて魂をまず浄化進化すること、愛と奉仕で生きることが本当の幸福だよ。そういうことを言うために宮沢賢治は死後の世界を描く、つまり死んだ後に生き方の結果が判りますから、生命は永遠ということを示せば、この因果の法が明らかになりますから、だから書いたのだと思います。生前の生き方がどれだけ愛と奉仕を行ったかという「魂の浄化進化の程度」で、死後の自分の行く世界が決定する、つまり「死後の世界は階層世界」である、これが描いてあるのが「銀河鉄道の夜」ですね。あとで見てゆきます。銀河鉄道の乗客たちの降りる駅、消える所が、乗客によって違いま